筑波大学　先史学・考古学研究　第26号　1-22　2015

論文

石製立花の型式学的研究

久　永　雅　宏

古墳時代中期の関東地方では「常総型石枕」と呼ばれる石枕を用いた葬祭儀礼が盛行する。この石枕には「立花」と呼ばれる滑石製品が付随することが知られている。立花は先行研究において，琴柱形石製品や玉杖形石製品との類似性や千葉県石神2号墳における所見から古代の「モガリ」との関連性が指摘されてきた。しかし，他の遺物群とは形態的な類似から関連性を指摘するに留まっており，「モガリ」に関しても現在以上に研究を発展させるためには新資料・新知見が必要な状況にある。本論では以上のような状況を踏まえ，基礎的な研究を行う必要性を認識し，立花の型式学的な研究を行うこととした。その結果，①立花の導入にあたり，茨城県常陸鏡塚古墳や千葉県山之辺手ひろがり3号墳だけでなく，千葉県七廻塚古墳も大きな役割を果たしていたこと，②葬送儀礼に石枕を用いる習俗は相互交流を持つ中小首長層間で共有されていたが，立花を石枕とセットで副葬する中小首長層はさらに限られることから，これらの副葬習俗には何らかの規制が存在していたことが考えられること，の2点を新たに指摘した。

Ⅰ．はじめに

立花状石製品や石製立花と呼称されている遺物（以下，立花とする）は，古墳時代の前期末葉から後期前葉にかけて，関東地方の古墳における葬祭儀礼や古墳の副葬品[1]として用いられた石製品[2]の一種類を指す。それらは，現在の千葉県側の東京湾沿岸と利根川中・下流域沿岸の地域に築造された古墳に集中して確認されている。

立花は石枕とともにいくつかの研究が報告されているが，琴柱形石製品や腕輪形石製品に代表される石製品・石製模造品の研究において進められてきたような型式分類があまり行われておらず，管見によれば，原田享二による研究を指摘しうるに過ぎない（原田 1990）。立花の型式学的研究とそれに基づく時期的変遷の把握は今後，①畿内を中心とした西日本に多く分布する琴柱形石製品や玉杖形石製品[3]との関連性や機能・用途などを検討していくこと，②石枕を伴わずに立花が単独で出土した古墳の年代的位置づけを明らかにすること，などの点において重要な基礎を提供することになる。

本論では立花の勾玉部と軸部の両方に着目した分類に基づいた型式を設定し，立花の型式的変遷について分析・考察する。また，琴柱形石製品や玉杖形石製品などの「杖」を模したと考えられる遺物群との関係性や今後の研究についての展望を述べることとしたい。

Ⅱ．研究史

1．名称と定義

「立花」と呼ばれる遺物は「立花状石製品」,「立花形石製品」,「石製立花」,「立花」と，論文・報告書の執筆者によって名称が異なる。現状では研究者ごとに異なる4つの名称が用いられているが，①2つないし4つの勾玉を背中合わせにした意匠をもつこと，②軸部は棒軸をもつか，極端に短い棒軸または通常の棒軸に孔が穿たれていることの2点において共通している。

「立花」と「立花状石製品」の名称を最初に用いた亀井正道は千葉県姉崎二子塚古墳例のような棒状の軸部をもつものを「立花」とし，茨城県常陸鏡塚古墳例のような軸部が極端に短く孔をもつものを「立花状石製品」とした。その上で，「一応立花状石製品が所謂立花の形態上の祖形となった事を認め得るかもしれない」と述べており，「立花状石製品」から「立花」が創出されたと認識している（亀井 1951）。しかし，亀井は後に「立花形石製品」の名称を用いて，「立花」と「立花状石製品」をまとめて捉えている（亀井 1973）。一方，原田享二は千葉県大戸宮作1号墳の報告書で，勾玉を4つ用いている千葉県山之辺手ひろがり3号墳例を「立花状石製品」とし，勾玉を2つ用いているものは「立花」としている（原田 1988）。また，北條芳隆は常陸鏡塚古墳例も含めてまとめて「立花状石製品」と呼んでいる（北條 1996）。

以上のように名称で区別されることもあるが，報告書ではとくに区別することなく「立花」や「石製立花」と呼称される場合が多い。また，白井久美子によって「木製立花」の存在が示唆されているが（白井 1991），各研究において「立花」と称する場合は基本的に石製立花を指している。

2．立花の調査・研究

立花が初めて確認された遺跡は，1947年に國學院大学によって発掘調査が行われた姉崎二子塚古墳であり，6点が出土している。その2年後に同じく國學院大学によって行われた常陸鏡塚古墳の発掘調査では1点が出土した。大場磐雄は常陸鏡塚古墳例について，埋葬施設内の出土場所から勾玉や管玉などと一緒に首飾りとして用いた「垂飾」の用途を想定している（大場・佐野 1956）。それに先駆けて亀井正道は，石枕の全国的な集成と型式分類を提示する中で立花を紹介している。姉崎二子塚古墳例から立花が樹立して用いられたと想定しているが，詳細な研究は別稿に譲るとして，装飾目的だけではなく何らかの意味があるとの可能性を示すに留まっている（亀井 1951）。

その後，東京湾沿岸と利根川流域の発掘調査によって中小古墳での出土が相次いだ。その中で千葉県石神2号墳出土の立花にネズミの歯痕がついていたことに注目した沼澤豊は「モガリ」儀礼の復元を試みた。分析の結果，ネズミの歯痕が残る副葬品と残らない副葬品が認められ，葬送祭祀で用いられた期間の違いや副葬順序が想定され，副葬品が「モガリ」の際にどの順序で副葬されたかについて復元案が提示された（沼澤 1977）。沼澤の研究は，後に杉山晋作がさらに細かい分析を加えている（杉山 1991）。

立花は1990年までに，12古墳，1集落遺跡において合計59点が報告された。これらの一部を型式分類し，その変遷を示したのは原田享二である（原田1990）。原田は立花を「樹立するもの」と捉え，軸部形態をA・B・Cの3型式に分類し，A型式のみ軸部に枘を作る位置によりAⅠからAⅣまでの4型式に細分している。そして，それらの変遷過程については，軸部に孔をもつC類に始まり，軸部に枘を作るA類が次に出現し，最後に枘を持たないB類の順で出現したとしている。これら3型式はB類の出現以後しばらくは併存し，姉崎二子塚古墳例をもってC類は消滅するとし，A類とB類は，中期末葉から後期初頭に比定されている堀之内3号墳例をもって消滅するとした。また，原田は立花の製作技法に言及したが，論考の中で具体的な事例は示さなかった。古墳時代後期前葉に関東地方では玉作遺跡が減少し，全国的にも石製模造品の副葬が衰退していく。この流れと軌を一にして立花も石枕も終焉を迎えることは，原田だけでなく他の研究者も一致した見解を示している（白井1991，杉山1991）。

原田享二の変遷案は立花に限ったものであった。その後，白井久美子によって石枕と立花を併せた編年案が示されている（白井1991；2013）。白井は古墳時代の関東を内陸（毛野・北武蔵）と水域（常総・総武）に分けて把握している（白井2002）。さらに水域を2つに分け，東京湾沿岸の上総を中心とする「総武」を中央からの影響・介入を受ける窓口とし，「常総」は在来勢力としている。その地域認識に基づいて，石枕と立花の分布を「香取海圏」と「東京湾岸」及び「東海地方」に分け，Ⅰ期からⅥ期の区分による常総型石枕祭祀の変遷案を提示している（白井2013）。

以上のように，白井は精力的に水域側に特化した地域色ある副葬品として石枕と立花を捉え，両遺物の研究を数多く行っているが，立花の起源としては琴柱形石製品や玉杖形石製品を挙げている（白井1991）。そうした琴柱形石製品と立花の関係性については北條芳隆と岡寺良が示唆に富んだ指摘を行っている。北條は滋賀県雪野山古墳から出土した琴柱形石製品を分析・考察する中で立花に言及し，①副葬位置が頭部付近であること，②琴柱形石製品と立花が「立て置き」の使用形態を示すこと，③奈良県富雄丸山古墳出土の琴柱形石製品に勾玉表現があり，常陸鏡塚古墳とほぼ同時期の築造年代と石製模造品各種を副葬する共通点があることなどから，「琴柱形石製品の地域的変容形態」として立花が出現した可能性を指摘している（北條1996）。また，岡寺も北條と同様の見解を示しつつ，琴柱形石製品には「垂飾」と「立て置き」の2つの使用方法があるとし，「立て置き」の使用方法が貫かれた結果，地域的変容として立花のようなものに変化していったのではないかと指摘している（岡寺2005）。

本節で述べてきたように，立花の時期的変遷についてはすでに先行研究があり，特に白井は石枕と併せた総合的な変遷案を示しており，参考となる指摘も多い。しかし，型式学的研究に関しては原田のみが行っている状況にある。北條や岡寺により琴柱形石製品との関連が指摘されながらも，琴柱形石製品からの型式的な変遷を示した研究は認められない。このような状況を踏まえるならば，今後立花と琴柱形石製品や玉杖形石製品との関係性を論じるにあたっては，立花の型式分類と変遷過程を提示することが必要であると考えられよう。

Ⅲ．分類

1．型式設定

ここではまず，立花の勾玉部と軸部に着目して分類を行う。先行研究において原田享二が機能面から立花を「樹立するもの」として捉え，軸部形態を基準に型式分類を行っている。しかし，立花の初現とされる常陸鏡塚古墳例では軸部がほぼなく，勾玉部は丸みを帯びて写実的につくられており，勾玉部が強く意識されていたことは明らかである。古代の人々が勾玉に特別な意味を与えていたことは周知のことであり，立花に勾玉が採用されていることにも何らかの関係性があると考えられる。関東地方で琴柱形石製品が地域変容した可能性も指摘されており（北條 1996，岡寺 2005），ここでは，勾玉部と軸部の両方について以下のような分類を採用することとしたい（第 1 図）。

勾玉部の分類

A 類：逆位の勾玉 2 つを連結した形状を示すもの
（頭部が丸みを帯びており写実的な形状をもつもの，穿孔が頭部にあるもの）。

B 類：勾玉の頭部と尾部の区別がつけ難く，三日月に近い形状を示すもの。

a 類：勾玉の頭部と尾部が深い弧をえがくもの（弧の内直径 / 内半径 = 0.29 以上）。

b 類：勾玉の頭部と尾部が比較的浅い弧をえがくもの（弧の内直径 / 内半径 = 0.29 未満）。

※左右で a 類と b 類が異なる場合は Ba 類として扱っている。

軸部の分類

Ⅰ類：軸部に孔が穿たれており，袋作りになっているもの（原田 C 類）。

Ⅱ類：軸部に孔はなく，明瞭な段を持つもの（原田 A 類）。

Ⅲ類：軸部に孔はなく，明瞭な段を持たないもの（原田 B 類）。

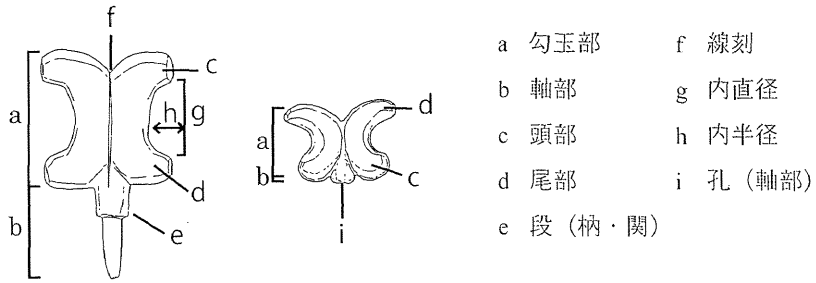
欠損につき分類が不可能な場合

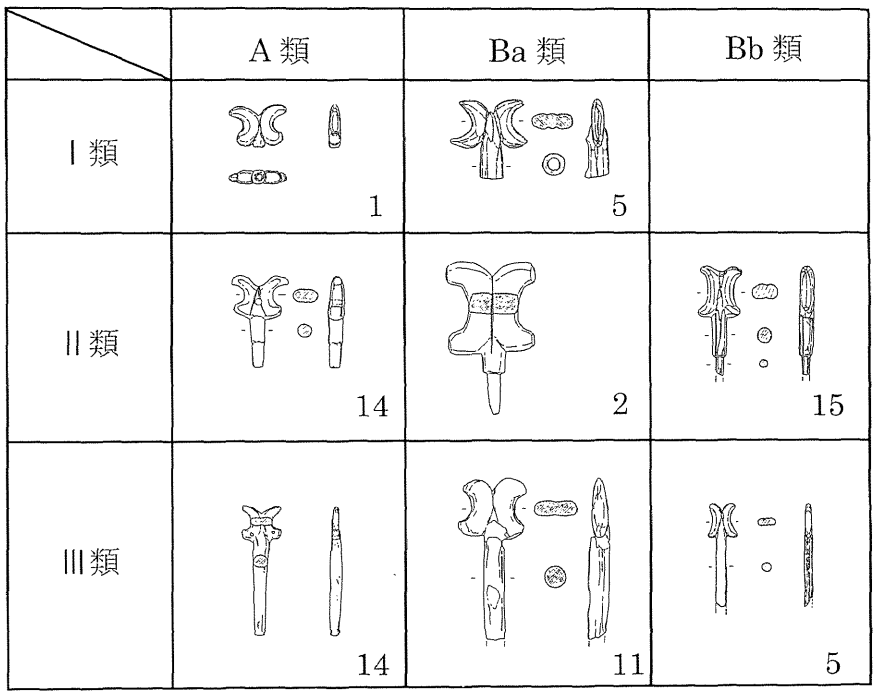
勾玉部ないし軸部が欠損している場合，欠損部位の分類を X として扱う。

2．勾玉部と軸部の形態変化の方向性

勾玉部は上述の通り，A 類と B 類に分類し，B 類は勾玉の内直径と内半径の比率により Ba 類と Bb 類に細分した。これらの 3 つの形態は，時期が下るにつれてどのように変化していくのであろうか。A 類は，逆位の勾玉を表現するために勾玉の頭部と尾部が明確でなくてはいけない。そのため，頭部は丸めにし，尾部に向けてなだらかな曲線を描きつつ細く仕上げる必要がある。Ba 類と Bb 類は頭部と尾部が明確ではなく，三日月に近い形状を示すことから，勾玉の中央は幅が広く，両方とも先端に向けて細くしていけば良い。また，両者の弧の深さについて，浅く作る Bb 類の方が Ba 類よりも製作の手順が簡略化されていると考えられる。以上のことから，A 類は Ba 類・Bb 類に比べて製作時の手順が難しくなり，Bb 類は Ba 類をある程度簡略化した形態と判断し，A 類→ Ba 類→ Bb 類の順に出現・消滅したものと想定したい。

軸部は原田享二の分類案を踏襲し，3 つの形態に分類した。結論から言うと，Ⅰ類（袋作り）





第１図　部位名称・型式分類凡例図
（部位名称は縮尺不同，凡例は縮尺 1/4，各番号は地図番号に対応）

→Ⅱ類（有段軸）→Ⅲ類（無段軸）の順に出現・消滅したものと考える。袋作りの場合は立花の細い軸部に孔を作るため，有段の場合は，軸部の長さと段までの長さを石枕の立花受孔のサイズに合わせるか，もしくは立花受孔のサイズを立花の軸部直径と段までの長さに合わせる必要が生じるため，どちらも製作が丁寧になると考えたからである。無段の場合には，軸部先端を立花受孔のサイズに合わせてあらかじめ決めておけばよいため，軸部に段をもつ立花よりも製作の手間を省略できると推測する。

Ⅳ．分析

以上の分類に基づき，本稿で対象とした遺跡で出土した立花を分類した。対象遺跡に関しては東京湾沿岸域，香取海圏，東海地域に分けて，それぞれで出土した資料を分析する。個々の遺跡の詳細については第1表と第1図，分類結果については第2表を参照していただきたい。

1．勾玉部A類と軸部

AⅠ型式は常陸鏡塚古墳，山之辺手ひろがり3号墳[4]，姉崎二子塚古墳で出土しており，合計点数は4点になる。いずれも軸部に孔が穿たれ，有機質の棒軸を用いて樹立されたと考えられる。常陸鏡塚古墳と山之辺手ひろがり3号墳の立花は，勾玉部には逆位の勾玉が明瞭に表現されている。姉崎二子塚古墳例は形態だけならばBa類に分類できるのだが，勾玉部に孔が穿たれており，そちらを頭部とするならば，逆位の勾玉が表現されていると考えた。形態的には，常陸鏡塚古墳例と山之辺手ひろがり3号墳例は形態が類似しており，時期的に近接していると考えられる。残る姉崎二子塚古墳例は勾玉部がBa類に類似し，軸部も他の2基と異なる厚みのある軸に孔が穿たれており，両古墳よりも後出の要素を備えている。

AⅡ型式は七廻塚古墳，石神2号墳，猫作・栗山16号墳で出土しており，合計点数は12点を数える。七廻塚古墳例は勾玉部が角張った作りとなっており，軸部の段は勾玉部寄りに作られている。石神2号墳例は逆位の勾玉が表現されてはいるが丁寧な作りとはいえず，常陸鏡塚古墳例と比べると簡素化しているといえるが，台形のような線刻が施されている点は特徴的である。軸部は七廻塚古墳例同様，勾玉部よりに段が作られる例や残存する軸部の中央付近に段が作られているものもある。猫作・栗山16号墳例は勾玉部の中央に穿孔がある例が多く，少数だが頭部に穿孔が施されている立花もある。頭部と尾部が明確に区別でき，一部には線刻が施されている。軸部の段は勾玉部よりは少し離れ，軸部全体の中央付近に作られている。また，1点のみ軸部が異なり，そろばん玉を模したのか段が2段になっている例が出土している。

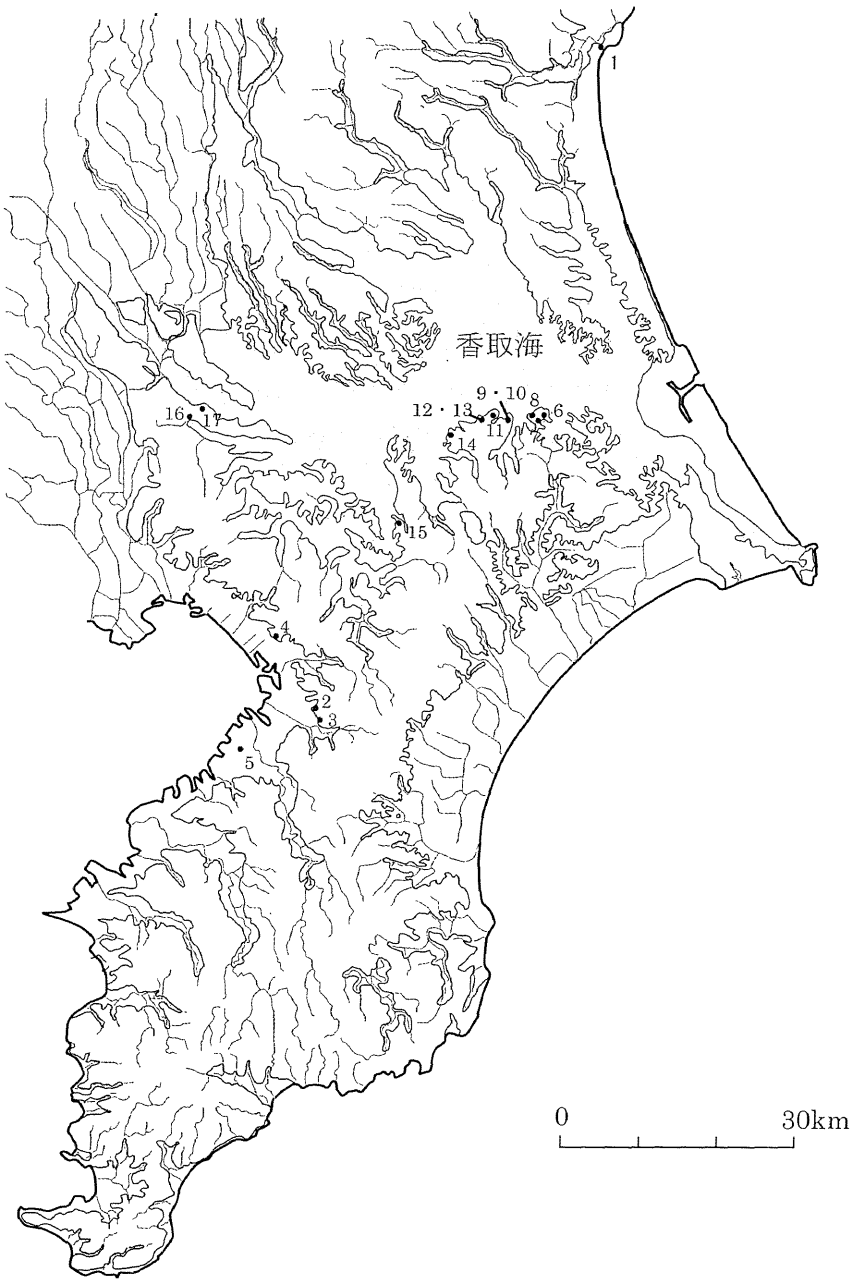
AⅢ型式は山之辺手ひろがり3号墳，石神2号墳，上赤塚1号墳，弁天古墳，猫作・栗山16号墳で合計25点が出土している。山之辺手ひろがり3号墳例はAⅠ類の2点と勾玉部の作りは共通している。軸部は短く，先端が尖っている。単独樹立は厳しく，筒状の物を用いて樹立する必要がある点で他の軸部Ⅲ類の形態を持つ立花とは異なる。石神2号墳例はAⅡ類と勾玉部の作りは共通しており，線刻も似た模様が刻まれている。軸部は先端が尖らない。上赤塚1号墳例は勾玉部が石神2号墳例に類似しているが，軸部に明瞭な段がない。軸部先端に向けて細くなる作り方がされている。弁天古墳例は他の立花よりも小型で，AⅢ型式でも丸みを帯びた逆位の勾玉が明瞭な4点と，扁平だが尾部先端が尖る形状から逆位の勾玉だと辛うじて見て取れる5点が出土している。軸部は先端に向けて細くなる。勾玉部の形状が2種類に分けられる点には何らかの理由があると考えられる。猫作・栗山16号墳はAⅡ型式と同様の勾玉部を持ちつつも段がないものになる。

まとめると，A類の勾玉部をもつ立花はAⅠ→AⅡ→AⅢ型式の順に出現している。AⅠ型式は常陸鏡塚古墳，AⅡ型式は七廻塚古墳が契機となっており，どちらも墳丘規模と副葬品の

第１表　対象遺跡と出土遺物

地図番号	遺跡名	形	所在地	石枕	立花	石製品・石製模造品	玉類	鉄製品	その他	文献番号
1	日下ヶ塚古墳 /常陸鏡塚古墳	●	茨城県東茨城郡 大洗町		1	刀子10, 鎌2, 鑿2, 鑿2, 鉋1, 鋤1, 鉞1, 鉄1, 紡錘車11	勾玉(滑)5, 臼玉(滑)3989, 管玉(碧)23・(滑)4	刀１	櫛10 ガラス小玉47	1
2	七廻塚古墳	○	千葉県千葉市中央区 生実町		10	刀子17, 斧4, 直刃鎌2, 剣形1, 石鉞(滑)1, 棒状品2	臼玉773	刀１, 剣１, 鎌２, 鉾４, 斧１, ヤリガンナ１	変形八乳鏡1 青銅製鏡1	2 3
3	上赤塚1号墳 (第1主体部)	○	千葉県千葉市中央区 南生実町	1	6	斧4, 直刃鎌2	勾玉(滑)3	刀２, 鎌１, 斧２, 鉄先３	銅鉞1 ガラス小玉32	2 4
4	石神2号墳	○	千葉県千葉市若葉区 東寺山町	2	18	刀子20, 直刃鎌4	勾玉1, 臼玉(滑)1854	剣２, 刀子２, 直刃鎌６, 斧２, 鉄先３, 鉇１, ヤリガンナ３		5 6
5	姉崎二子塚古墳 (前方部)	●	千葉県市原市姉崎	1	2		勾玉(瑪)1	刀２, 鉄鏃138, 鉾２, 短甲破片, 挂甲小札破片, 頸鎧１, 肩鎧１, 轡１	銀製長覆耳飾2	7 8 9
	姉崎二子塚古墳 (後円部)				4	刀子5, 有孔円板(滑)2	勾玉(硬)7・(滑)1, 臼玉(滑)3, 管玉(滑)4, 滑玉(琥)5	刀破片２, 鉾身破片１, 金銅青破片	金銅製魚鱗文金具1 蟠虺文鏡1 仿製変形文鏡1 仿製四神十二支鏡1 瑠璃小玉300以上	
6	山之辺手ひろがり 3号墳　(第1主体部)	□	千葉県香取市山之辺	1	1		勾玉(硬)2, 臼玉300, 管玉20	刀１, 剣１, 鉄鏃20	鈴4 ガラス小玉30	10 11
	山之辺手ひろがり 3号墳　(第2主体部)				1		勾玉2, 臼玉50, 管玉30		鈴2 銅製腕輪1 ガラス小玉60	
	山之辺手ひろがり 3号墳　(第3主体部)				1		臼玉50		ガラス小玉2	
7	玉造上の台遺跡	集落	千葉県香取市玉造		1					12 13
8	大戸宮作1号墳	□	千葉県香取市大戸	1	8	刀子8, 紡錘車1	臼玉(滑)1145, 管玉(碧)1, 琥珀玉1	剣１, 刀子１	ガラス小玉20	11 13
9	堀之内1号墳	○	千葉県香取市堀之内	1	3			刀１, 刀子３		14
10	堀之内3号墳	○	千葉県香取市堀之内		2		臼玉(滑)1, 管玉(硬)1, 琥珀玉1	刀破片４		14
11	北の内古墳 (第2主体部)	□	千葉県香取郡神崎町 並木	1	5	刀子5, 斧4, 曲刃鎌3	勾玉(滑)2	刀６, 剣２, 小型鉸具２		15
12	伝香取郡神崎町	?	千葉県香取郡神崎町		1					9
13	伝香取郡神崎町 小松	?	千葉県香取郡神崎町 小松	5	4					9
14	猫作・栗山18号墳	○	千葉県成田市滑川	3	15	刀子1, 斧1, 直刃鎌1, 円柱状石製品(緑泥)1	勾玉(瑪)1・(滑)31, 臼玉(滑)2016, 管玉(碧)1・(緑泥)21	剣２, 刀子１, 滑石模造品形刀子１	ガラス小玉5	16 17 18
15	船形手黒1号墳 (第1主体部)	○	千葉県成田市台方	1	4	不明23	勾玉(滑)1, 臼玉(滑)1	刀２, 剣１, 刀子１, 斧１, 鉋１, 不明４	ガラス小玉2 滑石片1.49kg	19
16	弁天古墳	●	千葉県柏市布施	1	9	刀子2, 斧3	臼玉(滑)253	剣１, 刀子１		20 21
17	金塚古墳	○	千葉県我孫子市根戸	1	1			鉄鏃３, 鉾１, 横矧板鋲留短甲１	鏡破片1	22 23
18	中野古墳	○	愛知県豊橋市 石巻本町	1	3	刀子2				24 25
19	西宮1号墳　(北槨)	○	静岡県藤枝市志多					鉄鏃23・2, 剣１, 斧？, 鉋2, 鉄棒？, 砥石	鋲轡1,	26 27 28
	西宮2号墳　(南槨)				2		勾玉4, 臼玉？		変形二神二獣鏡1, 子持大櫛？	

※墳形はそれぞれ, ●＝前方後円墳, ○＝円墳, □＝方墳・長方墳を示す。



第2図　関東地方における立花出土遺跡
（17愛知県中野古墳，18静岡県西之宮1号墳を除く）

第2表　型式別の各遺跡出土点数

地図番号	遺跡名	型式分類（出土点数）									
		A Ⅰ	A Ⅱ	A Ⅲ	Ba Ⅰ	Bb Ⅰ	Ba Ⅱ	Bb Ⅱ	Ba Ⅲ	Bb Ⅲ	分類不可
1	常陸鏡塚古墳	1									
2	七廻塚古墳（第2主体部）						4 （BaX）1				
	七廻塚古墳（第3主体部）		1				3				1
3	上赤塚1号墳（第1主体部）			3				1	2		
4	石神2号墳（主体部北側）		2	2			5				
	石神2号墳（主体部南側）		2	2			3		1		1
5	姉崎二子塚古墳（前方部）						2				
	姉崎二子塚古墳（後円部）	1			2					1	
6	山之辺手ひろがり3号墳	2		1							
7	玉造上の台遺跡						（BaX）1				
8	大戸宮作1号墳						7		1		
9	堀之内1号墳						3				
10	堀之内3号墳						1		1		
11	北の内古墳　（第2主体部）						1		4		
	北の内古墳　（墳丘盛土中）						2 （BaX）1				
12	伝　香取郡神崎町						1				
13	伝　香取郡神崎町小松						2		2		
14	猫作・栗山16号墳（主体部中央）		1								
	猫作・栗山16号墳（主体部南側）		1	5							
	猫作・栗山16号墳（主体部北側）		5	3							
15	船形手黒1号墳（第1主体部）							4			
16	弁天古墳			9							
17	金塚古墳							1			
18	中野古墳									3	
19	西宮1号墳（南棺）				1				1		
	合計点数	4	12	25	3	0	32 （BaX）3	6	12	4	2

観点からも有力な首長がいたことをうかがわせる。AⅢ型式は山之辺手ひろがり3号墳が初現だが，立花単独での樹立という観点から，七廻塚古墳に後続する石神2号墳が出現の契機になったと考えた方が良いのだろう。最終例について，AⅠ型式は中期中葉～後葉の姉崎二子塚古墳を最後に確認されていない。AⅡ・AⅢ型式は出現した古墳が異なるが，猫作・栗山16号墳を最後としている点は共通している。いずれの型式も，中期中葉が一つの画期になっていると考えられる。

2. 勾玉部B類と軸部

BaⅠ型式は姉崎二子塚古墳，西之宮1号墳で出土しており，合計3点を数える。姉崎二子塚古墳例の1点は勾玉部に穿孔がない点でAⅠ型式例と異なるが全体的な形状は類似している。残る1点は欠損が目立つも勾玉部は大型で扁平なつくりとなっている。西之宮1号墳例は勾玉部に突起と横線が線刻されている点が特徴的である。横線が線刻されている事例は石神2号墳を除けば本例のみである。勾玉部の特徴は伴出したBaⅡ型式の立花とも共通している。

BaⅡ型式は最も出土点数が多く合計で32点を数え，分布域が広い型式である。七廻塚古墳，石神2号墳，大戸宮作1号墳，姉崎二子塚古墳，北の内古墳，堀之内1号墳，堀之内3号墳，玉造上の台遺跡，西之宮1号墳，伝香取郡神崎町，伝香取郡神崎町小松で出土している。七廻塚古墳例はAⅡ型式同様，角張った形状をもち，軸部の段は勾玉部寄りの位置に作られている。また，本型式は石枕の分布が集中する香取海圏，特に利根川下流域において，他の型式よりも分布が集中している。大戸宮作1号墳例は典型的なBa類の勾玉部をもつが，後続する北の内古墳例や堀之内古墳群例のように，中期後半代になると勾玉部が扁平化していく傾向がある。

BaⅢ型式は七廻塚古墳，石神2号墳，上赤塚1号墳，大戸宮作1号墳，西之宮1号墳，北の内古墳，堀之内3号墳，伝香取郡神崎町で出土しており，合計12点を数える。勾玉部の形態は各遺跡ごとに出土したBaⅡ型式とほぼ同じもので，軸部形態のみが異なっている。堀之内3号墳例のみ異なり，伴出したBaⅡ型式とは勾玉部の形態が異なる。勾玉部は扁平で，石材からの剥離面が残る粗雑なつくりとなっており，研磨などの調整が施されなかったのだと推察される。同例はその形態から，Ba類の中では最も時期が下る例だと考えられる。

BbⅡ型式は上赤塚1号墳，船形手黒1号墳，金塚古墳で出土している。合計点数は6点になる。Ba類よりも弧が浅い勾玉部を持つ型式にあたり，上赤塚1号墳例を初現に，香取海圏でも西側の古墳で出土している。上赤塚1号墳例は頭部と尾部の長さがほぼ等しく，共伴した他の立花と異なり，勾玉部の近くに段が作られている。近接する七廻塚古墳例の影響があったと考えられる。船形手黒1号墳例は軸部中央付近に段が作られている点で異なるが，上赤塚1号墳例に類似している。金塚古墳例は1点のみの出土だが，尾部が頭部よりも長くなっている点を考慮すると，姉崎二子塚古墳例に通じるものがある。金塚古墳例は上赤塚1号墳例や船形手黒1号墳例と比べると形態が若干異なり，尾部が比較的長く作られていることから，後出のものと考えられる。

BbⅢ型式は姉崎二子塚古墳，中野古墳で出土しており，合計4点を数える。姉崎二子塚古墳例は後円部で石枕と伴出したBaⅡ型式の立花と勾玉部の意匠が共通している。段の有無が何に影響されたのか不明であり，本例のみ他型式の立花と共に石枕がない前方部に副葬されたことは興味深い点である。一方，常総型石枕が共伴した中野古墳では3点出土している。勾玉部の意匠が北の内古墳例に類似しているが，勾玉部が扁平な形状のためか弧が浅くなっている。おそらく，北の内古墳例よりは後出の形態といえるだろう。

以上から，出土点数が多かったBaⅡ型式が，立花が導入されて以後の香取海圏・東京湾沿

岸域において主流の型式だったといえる。そこから派生する形でBaⅢ型式，BbⅡ型式が作られ，各古墳において用いられたのだろう。BbⅢ型式は軸部に段を作らなくなったことでBbⅡ型式から生み出されたと考えられる。一方，BaⅠ型式は出土した古墳と時期が非常に限定されたものであることを確認できる。なお，BbⅠ型式については，今後の調査で出土する可能性があるが，勾玉部Bb類の出現時期と軸部Ⅰ類の消滅時期が近いため，副葬されていたとしてもごくわずかな古墳に限られるのではないかと予想される。

Ⅴ．考察

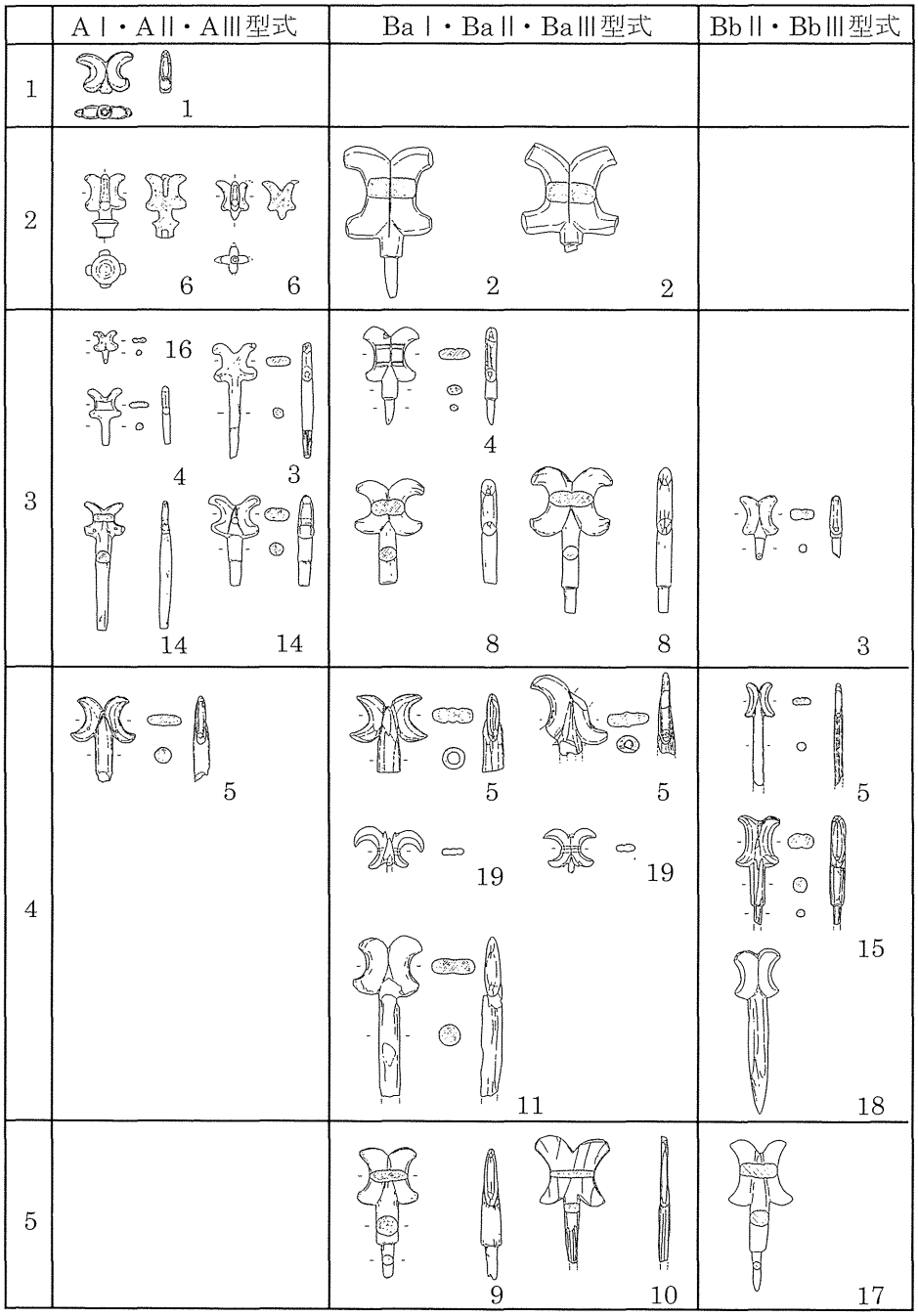
1．立花の時期的変遷

第3図および第3表は前章までの検討の結果を踏まえて作成した立花の編年案である。以下に，これらにしたがって立花の時期的な変遷を整理することとしたい。

1期は立花の出現期である。該当する常陸鏡塚古墳例は精巧なつくりの石製模造品が共伴し，奈良県富雄丸山古墳と並び前期末葉に位置づけることができる。副葬された立花は軸部が極端に短く孔が穿たれており，逆位の勾玉が写実的に表現されている。那珂川流域において，それまでの古墳とは隔絶した規模と副葬品をもつ常陸鏡塚古墳は畿内からの影響が色濃く，その出現は那珂川流域と香取海圏にとって少なからぬ影響を与えた可能性がある。

2期は立花の導入期にあたる。香取海圏の山之辺手ひろがり3号墳例と東京湾沿岸域の七廻塚古墳例が該当する。時期は中期初頭～前葉の時期にあたる。山之辺手ひろがり3号墳例は4つの勾玉が写実的に作られており，軸部も孔があるものと短いながら先端を尖らせた軸をもつ製品である。常陸鏡塚古墳と同様に，石枕を伴わない埋葬施設が2基存在し，残る1基から初期の常総型石枕が出土している。一方の七廻塚古墳では石枕は出土せず，勾玉とは言い難く，角張った形状をもつ立花が出土している。また，勾玉部の中央に縦に線刻が施されている点も特徴的である。これらの立花は勾玉部がA類とBa類，軸部がⅡ類に分類でき，常陸鏡塚古墳と山之辺手ひろがり3号墳の立花とは異なる型式であるBaⅡ型式は七廻塚古墳に始まる。

3期は立花の普及・発展期である。この時期に常総型石枕も増え，石枕や立花が副葬された古墳も増加する。3期前半には東京湾沿岸域の石神2号墳例，香取海圏の弁天古墳例，猫作・栗山16号墳例，3期後半には東京湾沿岸域の上赤塚1号墳例，香取海圏の大戸宮作1号墳例が位置付けられる。山之辺手ひろがり3号墳と七廻塚古墳から出土したA類とBa類の勾玉部をもつ立花が広がり，刀子形石製模造品から中期前葉に比定される石神2号墳ではA類とBa類双方の形態をもつ立花が出土し，香取海圏の弁天古墳と猫作・栗山16号墳ではA類の形態のみをもつ立花が出土している。弁天古墳と猫作・栗山16号墳は，各種石製模造品の形態から中期前葉～中葉に比定することができ，常総型石枕が伴出している。特に猫作・栗山16号墳は，石神2号墳や上赤塚1号墳と副葬品の内容や副葬位置が類似していることが注目される。弁天古墳は，全長35mという小型の前方後円墳であり，円墳や方墳を主体とする立花副葬古墳の中では特異な存在といえる。



第3図　型式別編年案（縮尺 1/4，各番号は遺跡地図番号に対応）

第3表　各型式の変遷と編年の対応関係

筆者編年	集成	田辺1981	小沢2008	白井2013	各型式の変遷									該当遺跡
					AⅠ	AⅡ	AⅢ	BaⅠ	BaⅡ	BaⅢ	BbⅠ	BbⅡ	BbⅢ	
1	4		1	Ⅰ										常陸鏡塚古墳
2	5	TG232 TG231	2a	Ⅱ										七廻塚古墳 山之辺手ひろがり3号墳
3	6	ON231	2b	Ⅲ										石神2号墳 弁天古墳 猫作・栗山16号墳
		TK73	3											上赤塚1号墳 大戸宮作1号墳
4		TK216	4	Ⅳ										船形手黒1号墳 西之宮1号墳 姉崎二子塚古墳
	7	ON46		Ⅴ										北の内古墳 中野古墳
5		TK208	5											堀之内1号墳 金塚古墳
	8	TK23 TK47	後期1期	Ⅵ										玉造上の台遺跡 堀之内3号墳

3期後半の上赤塚1号墳では，周溝から和泉式期の土器が出土しており，中期中葉に位置づけることができる。同古墳では，AⅢ型式の立花のなかに1点だけBbⅡ型式の立花が副葬されていた。段の位置が勾玉部に近いことや七廻塚古墳のBaⅡ型式の立花に通じる形態から，七廻塚古墳のBaⅡ型式を簡略化することで創出された形態であると考えられる。一方，同じく3期後半に比定した大戸宮作1号墳は年代特定に繋がる資料が少なく，各副葬品の相対年代から，石神2号墳や上赤塚1号墳よりは新しいことが指摘されている（原田1988）。同古墳はBaⅡ・BaⅢ型式に分類できる立花が出土しており，香取海圏，特に現在の利根川下流域において山之辺手ひろがり3号墳以来の立花副葬古墳である。

型式が最も多様化する4期は前半に船形手黒1号墳例，西之宮1号墳例，姉崎二子塚古墳例，後半に北の内古墳例，中野古墳例が位置付けられる。4期は東京湾沿岸域において有力な姉崎二子塚古墳を始め，東海地域に立花と常総型石枕が伝播した時期にあたる。この時期にAⅠ型式は姉崎二子塚古墳，BaⅠ型式は姉崎二子塚古墳・西之宮1号墳において終焉を迎える。両古墳の時期差は不明と言わざるを得ないが，これ以後，勾玉部A類及び軸部Ⅰ類の形態をもつ立花は確認されていない。注目される姉崎二子塚古墳ではAⅠ・BaⅠ・BaⅡ・BbⅢと多様な型式の立花が出土している。立花の各型式や有文石枕，各副葬品などから，同古墳の被葬者は畿内との関係はもちろん，香取海圏の中小古墳の被葬者とも関係をもっていた可能性が高い。

最終の5期は立花の衰退期にあたる。4期に東海地域にまで伝播したものの，5期には堀之内古墳群及び玉造上の台遺跡と手賀沼沿岸の金塚古墳に分布が縮小する。金塚古墳は横矧板鋲

留短甲から中期末葉に位置づけることができる。同古墳で出土した立花は1点のみで，BbⅡ型式に該当し，Bb類及びⅡ類の最も新しい例となる。堀之内古墳群は1号墳から5号墳まで確認されており，そのうちの1号墳では常総型石枕と立花が，3号墳では立花のみが出土している。1号墳は常総型石枕の形態から中期後葉に，3号墳は立花の形態から1号墳に後続すると考えられることから中期末葉～後期初頭に，それぞれを位置付けることができる。両古墳と玉造上の台遺跡で出土した立花はBaⅡ型式で，共通の意匠が用いられている。堀之内3号墳のBaⅢ型式の1点は形骸化が進んでおり，全体に研磨が施されず，粗雑な作りとなっている。本例がBa類とⅢ類の最終段階にあたる。

以上，立花を5期に分けて整理を行った。勾玉部と軸部の形態それぞれの変遷について，勾玉部・軸部は共に出現順序は推察した通りの展開となった。すなわち，勾玉部はA類→Ba類→Bb類，軸部はⅠ類→Ⅱ類→Ⅲ類の順に出現した。一方，消滅時期について，勾玉部はA類→Bb類→Ba類，軸部はⅠ類→Ⅱ類・Ⅲ類という結果になった。この勾玉部と軸部の出現・消滅時期に各型式を合わせれば，出現は常陸鏡塚古墳のAⅠ型式で間違いない。しかし，最終例と考えられる堀之内3号墳例はBaⅡ型式・BaⅢ型式で，どちらも勾玉部がBa類である。退化方向を辿るならBb類が最後に消滅するはずである。加えて，BaⅡ型式は最も盛行した型式である。これらのことから，勾玉部はBa類が，軸部はⅡ類がそれぞれ主流であったと判断でき，軸部に関しては段がある形態が最後まで貫かれていたと考えられる。

先行研究によれば，立花は常陸鏡塚古墳と山之辺手ひろがり3号墳が導入に大きな役割を果たしたとされる。しかし，ここでの分類にもとづいて改めて整理すると，七廻塚古墳の存在も無視できない。山之辺手ひろがり3号墳で最古期の常総型石枕と立花が結合したことは確かであろうが，それに後続する石神2号墳の石枕は香取海圏の流れを汲んでいるものの，立花は七廻塚古墳からの影響があったと考えられる。石神2号墳と時期が近い弁天古墳からは勾玉部A類のみの立花と定型化前の常総型石枕が出土していることから，山之辺手ひろがり3号墳の影響があった可能性があるが，猫作・栗山16号墳は石神2号墳や上赤塚1号墳との関係性があったと考えられる。七廻塚古墳例からの推測になるが，おそらく同例は香取海圏から立花が伝播したのではなく，何か祖型となる遺物から独自に生み出されたのではないだろうか。勾玉部の形態と大きさが他の立花とはかけ離れており，時期的に先行する常陸鏡塚古墳例や前後する山之辺手ひろがり3号墳例とは製作時の考え方が異なっていたと考えられる。

2. 立花の分布

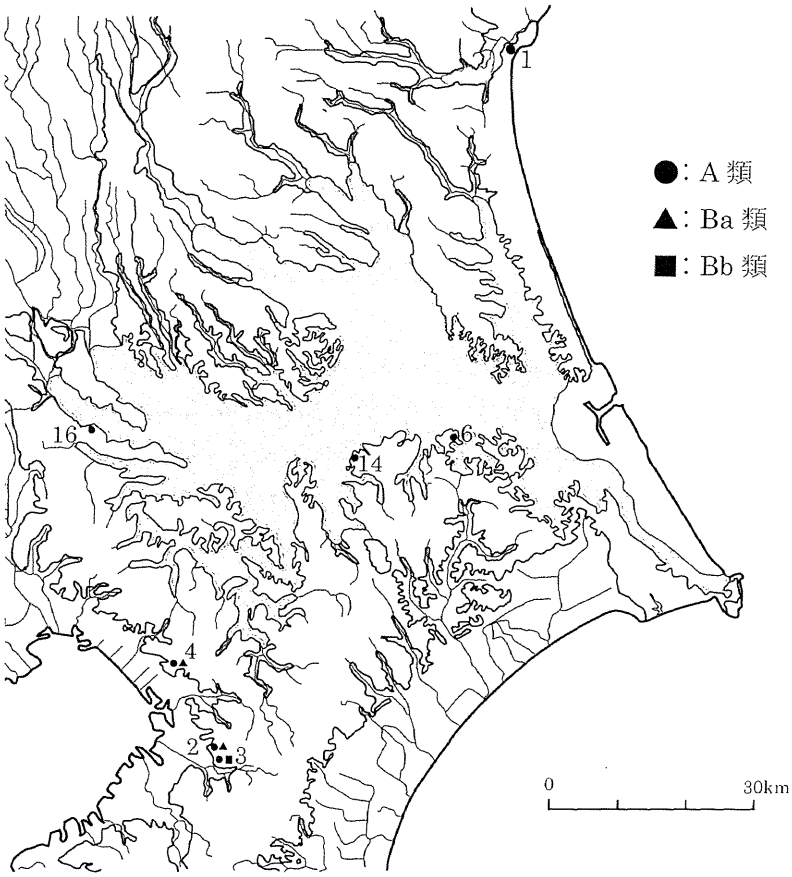
中期前葉～中葉までの分布をまとめると（第4図），A類は香取海圏・東京湾沿岸域で広く確認され，Ba類は手賀沼沿岸を除きA類と同様であるが，Bb類は東京湾沿岸の上赤塚1号墳の1例のみとなっている。つまり，中期中葉まではA類とBa類が主に製作・使用されていたが，Bb類は上赤塚1号墳の造営段階で創出され用いられた形態であるとみられる。ところが中期後葉になると変化が生じ（第5図），A類は姉崎二子塚古墳でのみ確認され，Ba類は大須賀川

流域を中心とした利根川下流域に分布し，Bb 類は大須賀川以西の古墳に分布するようになる。つまり，A 類と Bb 類は東京湾沿岸域，Ba 類は香取海圏を中心として，それぞれが用いられるのである。この例外として姉崎二子塚古墳があり，A 類・Ba 類・Bb 類の立花すべてが出土している。A 類は同古墳を最後とする一方，この時期に大須賀川流域へ分布を移している Ba 類が出土している点は注目される。立花を製作していた集団に関しては不明であるが，姉崎二子塚古墳に勾玉部の形態が異なる立花が副葬されていたことからすれば，姉崎の地にいた当時の首長は畿内からの玄関口である東京湾沿岸の養老川流域を治める一方で，香取海圏の首長たちとも交流をもっていた可能性が考えられる。

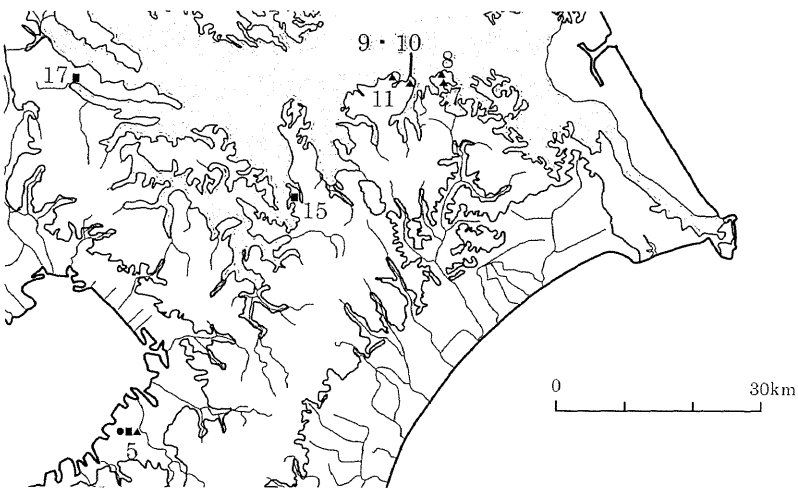
中期中葉を境とする分布図を作成した結果，①A 類は前期末葉から香取海圏・東京湾沿岸の地域で用いられ，中期中葉を境に衰退する，②Ba 類は A 類から少し遅れて中期前葉に東京湾沿岸で出現し，中期中葉を境に香取海圏の大須賀川流域へ分布を移すとほぼ同時に東海地域（西之宮 1 号墳）へ部分的に伝わる，③Bb 類は中期前葉～中葉にかけて出現して大須賀川以西で用いられ，一部は常総型石枕と共に東海地域（中野古墳）へ伝播する，といった各型式の分布状況が認められた。各型式が時期ごとに分布を移動している理由は不明だが，おそらく，製作集団を支配下に置く地域首長の存在が，この分布に関与していたと推測される。立花や石枕製作には，中期に関東地方各地で確認されている石製模造品の製作集団や千葉県大和田玉作遺跡，同県八代玉作遺跡などの玉作りの工人集団たちが関わっていたことが考えられる。しかし，玉造上の台遺跡を除くと，立花がそうした工人たちの居住集落から出土した例はないため，立花の製作地は不明と言わざるを得ない。

3. 首長間の交流

立花が副葬された古墳の被葬者たちは，石枕と立花をセットで用いるという考え方を相互の交流によって共有していたと考えられる。この交流は，出土した古墳の墳丘規模から，立花が副葬されていた 20 ～ 40m 規模の墳丘をもつ古墳の被葬者である中小首長層が主体となって行われていたことがうかがえる。既に古墳が削平されてしまったものもあるが，石枕は現在 70 例以上が確認されており，1 古墳に対して 1 ～ 3 個の石枕が副葬されていた。現在までに同一の主体部から複数の石枕が出土した事例としては石神 2 号墳で 2 個，猫作・栗山 16 号墳で 3 個が確認されているのみで，他の古墳では被葬者 1 人につき 1 個の石枕が副葬されている。しかし，石枕に伴って立花が副葬された古墳は 16 基と全体で確認されている石枕の出土古墳数と比べて少数である。葬送儀礼に対する意識は交流を通じて各地へもたらされていても，立花を用いる古墳は限定されていた状況がある。これに関して，①石枕に加えて立花も葬送儀礼で用い，副葬するという習俗を共有した集団が少なかった，②被葬者の階層性，③被葬者と工人集団との関係性，などの規制が働いていた可能性が想定される。しかし，そのうちのいずれが妥当性もつかについては，今のところ明確な追求の手がかりを持ち合わせていない。いずれにせよ，香取海圏・東京湾沿岸域の中小首長層は相互の交流関係を構築する中で，石枕や立花を



第 4 図　古墳時代中期前葉～中葉の立花出土遺跡



第 5 図　古墳時代中期後葉の立花出土遺跡

葬送儀礼に活用したが，そこには様々な規制が存在していた可能性があることは確かであろう。

Ⅵ. 結論

本論では従来の研究に対して，①立花の導入にあたり，常陸鏡塚古墳や山之辺手ひろがり3号墳だけでなく，七廻塚古墳も大きな役割を果たしていたこと，②石枕を用いる葬送儀礼は相互交流をもつ中小首長層間で共有されていたが，立花と石枕をセットで副葬する中小首長層は少ないことから，両者の使用には何らかの規制が存在していたこと，の2点を指摘できたと考えている。

本論では立花の勾玉部と軸部に着目し，それらの組み合わせによって立花の分類を試みた。その結果，立花が用いられた古墳時代前期末葉から後期初頭の間に，軸部に関しては，前半にⅠ類とⅡ類が多く用いられ，後半になるとⅠ類は消滅し，Ⅱ類が主流となる過程で，部分的にⅢ類が用いられたことが明らかになった。一方の勾玉部に関しては，A類→Ba類→Bb類の時間的変遷を辿ることが確認された。中期前半代はA類とBa類が東京湾沿岸域・香取海圏で広くみられ，中期前葉～中葉の時期になるとBb類が出現（上赤塚1号墳）するが，A類は衰退（姉崎二子塚古墳）する。その後，中期後半代には東京湾沿岸域で創出されたBa類が大須賀川流域の古墳で用いられ，Bb類は大須賀川以西の東京湾・手賀沼沿岸で用いられ衰退する。最終的に，Ba類は堀之内3号墳例，Bb類は金塚古墳例をもって副葬品として用いられなくなったようである。古墳時代後期に入ると全国的に石製模造品が衰退する時期にもあたるため，立花や石枕もこの影響を受けて用いられなくなったと考えられる。

Ⅶ. 今後の展望

最後に，本論での成果を踏まえつつ，今後の展望を述べておきたい。

まず，立花の祖型についてであるが，突然立花のような遺物が出現するとは考えにくい。先行研究では奈良県富雄丸山古墳で出土した琴柱形石製品雪野山類型が祖型として挙げられており（白井1991，北條1996，岡寺2005），常陸鏡塚古墳と富雄丸山古墳の刀子形石製模造品の形態比較を行った清喜裕二も関連を指摘している（清喜1994）。琴柱形石製品は形態的特徴や副葬位置が頭部付近であることが多いことも併せて，立花との関連は高いものと考えられる。その中でも，奈良県赤土山古墳で出土した玉杖形石製品は立花の祖型の一つである可能性が高いと考えている[5)]。本例は桜井茶臼山古墳やメスリ山古墳に代表される玉杖形石製品とは異なる特徴をもつ。①逆位の勾玉が作りこまれていること，②軸部には棒軸を差し込むことが可能な孔が穿たれていること，③角状突起と軸部に線刻が施されていることの3点がそれにあたる。横方向に走る線刻や，上方へ伸びる突起は琴柱形石製品との関連をうかがわせるものである。おそらく本製品を簡略化すれば，七廻塚古墳で出土した立花になるのではないだろうか。赤土山古墳例と七廻塚古墳例の間の関係性は論じられなかったが，七廻塚古墳例は常陸鏡塚古墳例とは形態が異なり，祖型が別々にあった可能性もあることから，ここでは特に赤土山古墳例の

重要性を指摘しておきたい。

次に白井久美子が述べる「常総型石枕祭祀」について言及しておきたい。本論では，常陸鏡塚古墳のみに限らず，七廻塚古墳にも石枕祭祀の初現を求めることが可能なのではないかと考えた。杉山晋作が述べるように，石枕を用いた葬送儀礼がそれまでのものと大きく異なるということは考えにくい（杉山 1991）。畿内→常陸鏡塚古墳→常総地域という唯一のルートを想定するよりも，七廻塚古墳も含めた複数のルートを想定することが可能なのではないだろうか。琴柱形石製品や玉杖形石製品の副葬も，葬送儀礼に「杖」を用いる思想から発していると考えられ，立花もその思想の影響を少なからず受けている可能性が高い。「常総型石枕祭祀」が畿内を中心とした当時の列島で行われていた祭祀と著しく異なるということは考えにくく，畿内で生まれた器物が関東で用いられるようになり，一部分が誇張された結果として特徴的な立花と石枕が生まれたものと考えたい。いずれにせよ，古墳時代前期から用いられてきたと考えられる「杖」形製品に関しては，立花との関連を視野にいれて今後研究を行っていく必要があると思われる。

最後に立花を製作した集団の問題にも触れておきたい。中小首長層は，立花だけでなく土器や他の副葬品などを製作する集団を抱えていたと考えられる。立花が出土している古墳が少ないことに言及したが，被葬者の階層性や工人集団との関係性などの可能性を想定した。現状では判断できる材料はもちあわせていないが，他の石製品・石製模造品とあわせて，製作していた集団について今後の研究で追及していきたい。

謝辞

本論は，2013 年度に琉球大学法文学部人間科学科地理歴史人類学専攻へ提出した卒業論文を加筆・修正したものである。修正にあたり沖縄にいながら古墳時代の研究を行っていた私に厳しくも温かいご指導をいただいた琉球大学の池田榮史先生，大学院入学以来，温かくご指導をいただいている筑波大学の滝沢誠先生には心から感謝の意を表したい。また，琉球大学の後藤雅彦先生，卒業論文執筆時に協力をいただいた琉球大学考古学研究室の諸氏に，末筆ではあるが改めて御礼を申し上げたい。

註

1) 副葬という言葉に関して，本論では埋葬施設ないしそれに準じる施設に埋納された遺物を全て副葬品として扱っている。石枕に関しては高木博彦の規定に従い，「埋葬の施設から切り離し，いわゆる遺物として考えられる範囲に含まれるもので，頭を受ける部分に目的に応じた加工がされているもの」として扱う（高木ほか 1979）。とくに棺と一体化した枕を玉類や鉄製品類などの副葬品と同列に扱って良いものかどうか多少なりとも問題となるが，高木の規定を用い，本論では石枕も副葬品として扱う。

2) 副葬品の「石製品」と祭祀具の「石製模造品」は別々に研究が進められてきたが，近年になって一体化した研究の必要性と，用語が乱立している現状を鑑みて，「石製祭具（複合）」（北條 1999）や「石製葬祭具」（篠原 2006）などの用語が提唱されている。また，北條はまとめて「石製品」としたうえで「材質転換型」,「折衷型」,「模造型」,「創造型」に細分している（北條 2012）。立花は，篠原祐一によれば「石製祭具」（篠原 2006），北條によれば括弧つきではあるが「石製品」の「材質転換型」にそれぞれ分類されている。なお，本論では「石製品」を石枕，立花，琴柱形石製品などの遺物，「石製模造品」を刀子形や斧形などの模造品を扱う名称として用いている。

3) 玉杖形石製品は琴柱形石製品の松林山型（雪野山類型）の名称として亀井正道によって提唱された（亀井 1973）。しかし，この名称は奈良県メスリ山古墳や同県桜井茶臼山古墳で出土した碧玉製の儀杖を指すことがある。そのため，本論では琴柱形石製品は北條芳隆の分類名称を用い（北條 1996），玉杖形石製品は杖形の石製品を指す名称として用いている。

4) 山之辺手ひろがり 3 号墳で出土した立花は 3 点あり，どの主体部からどの立花が出土したのかということは報告されていないが，それぞれが別々の埋葬施設で出土したことが確認されているため（平野 2003），本論では埋葬施設ごとに区別をつけて述べている。

5) 赤土山古墳は奈良県天理市所在の前方後円墳（復元全長 110m，前期末葉）である。地震により埋葬施設から墳丘裾部に滑落したと推定されている遺物群に，本論で取り上げた玉杖形石製品がある。琴柱形石製品雪野山類型との関連性がある形態を持ち，岡寺良の論考において雪野山類型として扱われている製品はおそらく本例を指していると考えられる（岡寺 2005）。本論では天理市の報告に基づいて玉杖形石製品として扱っている（天理市教育委員会 2001）。本例は図化されていないため，現地説明会の資料（天理市教育委員会 2001），史跡整備報告書（松本 2003），櫻井久之の研究（櫻井 2002）を参考にした。

参考文献

大場磐雄・亀井正道　1951 「上総国姉ヶ崎二子塚発掘調査概報」『考古学雑誌』第 37 巻第 3 号　158-170 頁.

大場磐雄・佐野大和　1956 『常陸鏡塚』國學院大学考古学研究報告 1　綜芸舎.

岡寺　良　2005 「琴柱形石製品の型式学的研究」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学研究室　485-500 頁.

小沢　洋　2008 『房総古墳文化の研究』六一書房.

亀井正道　1951 「古墳出土の石枕について」『上代文化』20 号　28-36 頁.

――――　1973 「琴柱形石製品考」『東京国立博物館紀要』第 83 号　東京国立博物館　5-12，31-170 頁.

川西宏幸　1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻第 2 号　95-164 頁.

近藤義郎編　1991 『前方後円墳集成　東北・関東編』山川出版社.

櫻井久之　2002 「難波宮下層出土の石製垂飾について」『大阪市歴史博物館研究紀要』第 1 号　大阪歴史博物館　3-16 頁.

篠原祐一　2006 「石製模造品と祭祀の玉」『季刊考古学』第 94 号　48-51 頁.

白井久美子　1991 「石製立花と石枕の出現－枕造り付け木棺考－」『古代探叢Ⅲ－早稲田大学考古学会創立40周年記念考古学論集』早稲田大学出版部　335-354頁.

――――　2002 「常総の内海をめぐる石枕と立花の時代」『古墳から見た列島東縁世界の形成－総武・常総の内海をめぐる古墳文化の相克』千葉大学考古学研究叢書2　119-147頁.

――――　2007 「関東における古墳形成の特性」『考古学研究』第54巻第3号　34-50頁.

――――　2011 「石枕と葬送」『平成23年度千葉県遺跡調査研究会発表要旨』 財団法人千葉県教育振興財団　21-29頁.

――――　2012 「古墳の様相」『研究紀要』27　財団法人千葉県教育振興財団文化財センター　29-48頁.

――――　2013 「石枕と立花の諸段階－東海出土資料の位置づけ－」『技術と交流の考古学』同成社　613-624頁.

白石太一郎　1985 「神まつりと古墳の祭祀－古墳出土の石製模造品を中心として－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集　国立歴史民俗博物館　79-114頁.

杉山晋作　1985 「石製刀子とその使途」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集　国立歴史民俗博物館　115-133頁.

――――　1991 「石枕・立花と死者の送り」『古代探叢Ⅲ－早稲田大学考古学会創立40周年記念考古学論集』早稲田大学出版部　355-378頁.

清喜裕二　1994 「古墳出土農工具形石製模造品の研究－富雄丸山古墳と鏡塚古墳－」『文化財学論集』文化財学論集刊行会　713-722頁.

高木博彦ほか　1979 『日本の石枕』千葉県立房総風土記の丘.

田辺昭三　1981 『須恵器大成』角川書店.

天理市教育委員会　2001 『赤土山古墳（第6・7次）現地説明会資料』.

西島庸介　2007 「琴柱形石製品の研究」『考古学集刊』明治大学文学部考古学研究室　65-87頁.

沼澤　豊　1977 「石神2号墳の諸問題」『東寺山石神遺跡』財団法人千葉県文化財センター　118-154頁.

原田享二　1988 『佐原市内遺跡群発掘調査概報Ⅱ』佐原市教育委員会.

――――　1990 「立花の分類と変遷」『おおとね』千葉県立利根博物館報第39号　2頁.

平野　功　2003 「大須賀川下流域の古墳群」『千葉県の歴史　資料編　考古2（弥生・古墳時代）』財団法人千葉県史料研究財団　1011-1014頁.

北條芳隆　1996 「雪野山古墳の石製品」『雪野山古墳の研究』考察篇　八日市市教育委員会　309-350頁.

――――　1999 「古墳時代の石製品研究をめぐって」『月刊考古学ジャーナル』No.453　2-5頁.

――――　2012 「石製品と倭王権」『講座日本の考古学8　古墳時代（下）』青木書店　63-98頁.

松本洋明　2003 『史跡赤土山古墳　第4次～第8次発掘調査概要報告書』天理市教育委員会.

引用報告書（表1掲載遺跡順，番号は表1の文献番号に対応）

1：大場磐雄・佐野大和　1956 『常陸鏡塚』國學院大学考古学研究報告1　綜芸舎.

2：白井久美子・西野雅人　2003 「生実・椎名崎遺跡群」『千葉県の歴史　資料編　考古2（弥生・古墳時代）』財団法人千葉県史料研究財団　762-776頁.

3：千葉市史編纂委員会　1976 『千葉市史　史料編1－原始古代中世－』.

4：栗田則久　1982 『千葉東南部ニュータウン13－上赤塚1号墳・狐塚古墳群－』財団法人千葉県文化財センター.

5：白井久美子　2003 「東寺山石神2号墳」『千葉県の歴史　資料編　考古2（弥生・古墳時代）』財団法人千葉県史料研究財団　794-799頁.

6：沼澤　豊ほか　1977 『東寺山石神遺跡』財団法人千葉県文化財センター.
7：大場磐雄・亀井正道　1951 「上総国姉ヶ崎二子塚発掘調査概報」『考古学雑誌』第 37 巻第 3 号　158-170 頁.
8：白井久美子　2003 「姉崎古墳群」『千葉県の歴史　資料編　考古 2（弥生・古墳時代）』財団法人千葉県史料研究財団　682-706 頁.
9：財団法人千葉県史料研究財団　2002 『千葉県史編さん資料　千葉県古墳時代関係資料』第 1 分冊.
10：原田享二　1988 『佐原市内遺跡群発掘調査概報Ⅱ』佐原市教育委員会.
11：平野　功　2003 「大須賀川下流域の古墳群」『千葉県の歴史　資料編　考古 2（弥生・古墳時代）』財団法人千葉県史料研究財団　1011-1014 頁.
12：原田享二　1983 「（速報）千葉県佐原市玉造上の台遺跡の調査」『月刊考古学ジャーナル』No.222　22-25 頁.
13：原田享二ほか　1988 『佐原市内遺跡群発掘調査概報Ⅱ』佐原市教育委員会.
14：渋谷興平ほか　1982 『堀之内遺跡』東京文化史学会.
15：鬼澤昭夫　2005 『北の内古墳』財団法人香取郡市文化財センター.
16：荒井世志紀　2003 「猫作・栗山古墳群」『千葉県の歴史　資料編　考古 2（弥生・古墳時代）』財団法人千葉県史料研究財団　990-993 頁.
17：上野恵司　1992 「千葉県香取郡下総町猫作・栗山古墳群」『日本考古学年報 43（1990 年度）』　450-454 頁.
18：坂本行広　1995 『猫作・栗山 16 号墳』財団法人香取郡市文化財センター.
19：根本岳史ほか　2011 『船形手黒 1 号墳』財団法人印旛郡市文化財センター.
20：古谷　毅　2003 「弁天古墳」『千葉県の歴史　資料編　考古 2（弥生・古墳時代）』財団法人千葉県史料研究財団　860-864 頁.
21：古宮隆信　1993 『柏市史調査研究報告Ⅲ』弁天古墳発掘調査団.
22：甘粕　健ほか　1969 『我孫子古墳群』我孫子町教育委員会.
23：古谷　毅　2003 「我孫子古墳群」『千葉県の歴史　資料編　考古 2（弥生・古墳時代）』　財団法人千葉県史料研究財団　865-877 頁.
24：愛知県八名郡　1926 『八名郡誌』.
25：芳賀　陽　2001 『中野遺跡・東郷内 1 号窯・西上遺跡・伊奈遺跡・野添遺跡』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第 60 集　豊橋市教育委員会.
26：白井久美子　2013 「石枕と立花の諸段階－東海出土資料の位置づけ－」『技術と交流の考古学』同成社　613-624 頁.
27：川江秀孝　1992 『静岡県史　資料編 3　考古三』静岡県.
28：八木勝行　2010 「初期群集墳と志太平野古墳文化の形成」『藤枝市史　通史編上　原始・古代』藤枝市　121-154 頁.
29：中井正幸・鈴木一有　2011 「東海」『講座日本の考古学 7　古墳時代（上）』青木書店　318-351 頁.

図版出典

第 1・2・3 表：各遺跡の参考文献を基に筆者作成。

第 1・3 図：筆者作成。

第 2・4・5 図：白井 2012 第 11 図（23 頁）を再トレース。一部改変。

Typology of *Rikka* (Ornaments for Stone Headrest)

HISANAGA, Masahiro

In the middle Kofun period, funeral rituals utilized 'Jouso-type ritual pillow stone' in the Kanto region. It is common knowledge that Ritual pillow stone accompanies 'ornaments for stone headrest' called '*Rikka*'. In previous research they are associated with Kotoji-shaped stone objects and Cane-shaped stone objects, and a Japanese ancient funeral ritual 'Mogari'. Therefore, review and update of prior research and background study on the *Rikka* typology is necessary before further work can be implemented.

Analysis indicates, it played a big role in not only Hitachikagamizuka kofun in Ibaraki prefecture and Yamanobe Tehirogari No.3 kofun in Chiba prefecture, but also Nanamawarizuka kofun in Chiba prefecture, which represents the introduction of *Rikka* in the Kanto region. Therefore I consider burial customs were regulated in the Kanto region. Middle and lower rank chiefs shared burial customs that included burying ritual pillow stone in their kofun and could represent inter-group communication. However, even though only a few chiefs were buried with the *Rikka* and ritual pillow stone as a set, this burial custom may still indicate a regulatory practice.